

## 7 動物

### 7.1 調査

#### 1) 調査項目

調査項目は、表 10.7.1-1 に示すとおりである。

表 10.7.1-1 調査項目

調査項目	
動物相の状況	・ 生息種及び動物相の特徴
保全すべき種の状況	・ 埼玉県レッドデータブック及び環境省レッドリスト掲載種、学術上重要な種、地域住民の生活に密接に関わる種、その他の保全が必要な種等の保全すべき種の生息域及び個体数又は生息密度 ・ 生息環境
その他の予測・評価に必要な事項	・ 広域的な動物相及び動物分布の状況 ・ 過去の動物相の変遷 ・ 地域住民その他の人との関わり状況

#### 2) 調査方法

##### (1) 既存資料調査

既存資料調査は、表 10.7.1-2 に示す資料について収集、整理した。

表 10.7.1-2 調査方法（既存資料調査）

調査項目	収集資料
動物相の状況 ・ 哺乳類          ・ 鳥類 ・ 爬虫類          ・ 両生類 ・ 昆虫類          ・ 魚類 ・ 底生動物      ・ 猛禽類	下記資料を調査し、動物相の状況等を把握した。 ・ 「埼玉県レッドデータブック動物編 2018（第4版）（埼玉県、2018年）」 ・ 「第2回～第6回自然環境保全基礎調査（環境省、1978年～2005年）」 ・ 「上尾市植物動物調査報告書（上尾市、平成3年3月）」 ・ 「伊奈町史資料調査報告書 第十四集 伊奈の野鳥（伊奈町史編集室）」
生息環境の状況	植物の生育環境との関わりと動物の生息環境の関わりについて文献、植物調査結果等も参考にして明らかにした。
その他の関連事項 ・ 広域的な動物相及び動物分布の状況 ・ 過去の動物相の変遷 ・ 地域住民その他の人との関わりの状況	既存資料調査、現地調査結果から総合的に考察した。また、必要に応じて地域住民からの聴き取りによった。

(2) 現地調査

動物相の状況及び保全すべき種に係る現地調査方法等について、表 10.7.1-3 に示す。

哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類の調査範囲は、対象事業実施区域及びその境界から概ね 200m 程度の範囲、魚類、底生動物は原市沼川、猛禽類の調査範囲は対象事業実施区域及びその境界から概ね 2,000m 程度の範囲とした。各項目における調査地点は図 10.7.1-1 に示すとおりである。

また、猛禽類調査地点の視野状況を表 10.7.1-4 に示す。

表 10.7.1-3 (1/4) 調査方法 (現地調査)

区分	調査項目	調査方法
動物相の状況	哺乳類	直接観察法、フィールドサイン法、シャーマントラップ法、無人撮影法
	鳥類	任意観察法、直接観察法 (定点センサス法、ルートセンサス法)
	爬虫類	直接観察法、卵塊・幼生調査、鳴声調査
	両生類	直接観察法
	昆虫類	直接観察法、ビーティング法、スウィーピング法、ライトトラップ法、ベイトトラップ法
	魚類	タモ網、投網、セルビン、カゴ網による捕獲調査
	底生動物	コドラート法による定量採集、タモ網を用いた定性採集
	猛禽類	「猛禽類保護の進め方(改訂版)-特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて-平成 24 年環境省自然環境局野生生物課」に準拠
保全すべき種の状況	保全すべき種	保全すべき種の生息箇所、個体数、密度、分布、繁殖行動、食性、他種との関係等を明らかにする。

表 10.7.1-3 (2/4) 調査時期一覧

調査項目	令和 6 年	令和 7 年					
	—	冬季	早春季	春季	初夏	夏季	秋季
哺乳類		○		○		○	○
鳥類		○		○	○	○	○
爬虫類			○	○		○	○
両生類			○	○		○	○
昆虫類				○	○	○	○
魚類		○		○		○	○
底生動物		○		○		○	○
猛禽類	令和 6 年 1 月～8 月、令和 7 年 1 月～8 月						

表 10.7.1-3 (3/4) 調査日程 (哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、魚類、底生動物)


調査時期	調査日	調査項目
冬季	令和7年 1月8日～9日	哺乳類
	1月8日～9日	魚類、底生動物
	1月31日～2月1日	鳥類
早春季	令和7年 3月17日～18日	爬虫類、両生類
春季	令和7年 4月21日～23日	哺乳類、爬虫類、両生類
	4月17日～18日	鳥類
	4月17日～19日	昆虫類
	4月21日～23日	魚類、底生動物
初夏季	令和7年 6月19日～20日	鳥類
	7月1日～3日	昆虫類
夏季	令和7年 7月1日～4日	哺乳類、爬虫類、両生類
	7月1日～4日	魚類、底生動物
	8月8日	鳥類
	8月20日～22日	昆虫類
秋季	令和7年 9月8日～11日	哺乳類、爬虫類、両生類
	9月8日～11日	魚類、底生動物
	10月14日～16日	鳥類、昆虫類

表 10.7.1-3 (4/4) 調査日程 (猛禽類)


調査回数		調査時期
定点調査	第1 営巣期	第1回調査 令和6年 1月23日～25日
		第2回調査 令和6年 2月19日～21日
		第3回調査 令和6年 3月13日～15日
		第4回調査 令和6年 4月16日～18日
		第5回調査 令和6年 5月28日～30日
		第6回調査 令和6年 6月25日～27日
		第7回調査 令和6年 7月17日～19日
		第8回調査 令和6年 8月20日～22日
	第2 営巣期	第1回調査 令和7年 1月28日～30日
		第2回調査 令和7年 2月18日～20日
		第3回調査 令和7年 3月12日～14日
		第4回調査 令和7年 4月15日～17日
		第5回調査 令和7年 5月20日～22日
		第6回調査 令和7年 6月17日～19日
		第7回調査 令和7年 7月15日～17日
		第8回調査 令和7年 8月5日～7日


保全すべき種の保護の観点から、一部を非公開とした。


凡例

 : 対象事業  
実施区域


 : 調査範囲


 : 原市沼川

 : 側溝、  
旧水路、  
水路


 : 市町界


【哺乳類】

 : トラップ法調査地点


 : 無人撮影法調査地点


【鳥類】

 : 定点センサス法調査地点


 : ルートセンサス法調査地点

【昆虫類】

 : ライトトラップ法調査地点

 : ベイトトラップ法調査地点

【魚類・底生動物】

 : 魚類・底生動物調査地点



S = 1:10,000




この地図は、国土地理院発行の電子地図2万5千分の1を使用したものである。

図10.7.1-1(1/2) 動物調査地点

保全すべき種の保護の観点から、一部を非公開とした。

凡例

 : 対象事業実施区域     : 市町界

 : 猛禽類調査地点（定点）



S = 1:25,000



この地図は、国土地理院発行の電子地図2万5千分の1を使用したものである。

図10.7.1-1 (2/2) 猛禽類調査地点

表 10.7.1-4 猛禽類調査の定点及び視野の状況

定点	視野の状況	調査地点からの見え方
R-1	対象事業実施区域の南側。対象事業実施区域上空及びその南側を広く視認できる。	
R-2	対象事業実施区域の西側。対象事業実施区域上空及びその西側の上空を広く視認できる。	
R-3	対象事業実施区域の北側。対象事業実施区域上空及びその北～北東側を広く視認できる。	
R-4	対象事業実施区域の東側。保全林があり、保全林上空とその周辺を視認できる。	
R-5	対象事業実施区域の南東側。日本薬科大学の敷地林南側を視認できる。	
R-6	対象事業実施区域の南側。日本薬科大学の敷地林南側を視認できる。	
R-7	対象事業実施区域の東側。R-4 付近に位置する保全林上空とその周辺を広く視認できる。	
R-8	対象事業実施区域の南側。対象事業実施区域の南側を広く視認できる。	
R-9	対象事業実施区域の南側で R-1 より南側に位置する。対象事業実施区域及びその南側を広く視認できる。	

### 3) 調査結果

#### (1) 動物相の状況

##### ① 既存資料調査

動物相の状況に係る調査結果は、「第3章 地域特性の把握、2 自然的状況、2.5 動植物の生息又は生育、植生及び生態系の状況、1) 重要な動物種及び生息地の状況 (p. 3-89)」に示すとおりである。

##### ② 現地調査

#### ア 哺乳類相

##### ・種構成

春季、夏季、秋季、冬季の調査で5目9科10種を確認した(表10.7.1-5参照)。

小型哺乳類ではアズマモグラ、アブラコウモリ、アカネズミが、中型哺乳類ではノウサギ、タヌキ、キツネ、ハクビシン等が広い範囲で確認された。確認された種は平地から山地まで広い範囲に生息する種が多かった。対象事業実施区域内の畑地や草地周辺で確認された種はアズマモグラ、タヌキが多かった。各種の確認状況を表10.7.1-6に示す。

表 10.7.1-5 確認された哺乳類

No.	目	科	種	学名	対象事業実施区域		確認時期				自動撮影
					内	外	冬季	春季	夏季	秋季	
1	モグラ	モグラ	アズマモグラ	<i>Mogera imaizumii</i>	●	●	●	●	●	●	
2	コウモリ	ヒナコウモリ	アブラコウモリ※1	<i>Pipistrellus abramus</i>	●	●			●		
3	ウサギ	ウサギ	ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>		●				●	
4	ネズミ	ネズミ	アカネズミ※2	<i>Apodemus speciosus</i>	●	●	●	●	●	●	
5	ネコ	アライグマ	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	●	●	●	●	●	●	●
6		イヌ	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>	●	●	●		●	●	●
7			キツネ	<i>Vulpes vulpes</i>	●	●	●	●	●		●
8		イタチ	アナグマ	<i>Meles anakuma</i>		●					●
9		ジャコウネコ	ハクビシン	<i>Paguma larvata</i>	●	●			●	●	●
10		ネコ	ノネコ	<i>Felis catus</i>	●	●		●	●	●	●
合計	5目	9科	10種	—	8種	10種	5種	5種	8種	7種	6種

注：分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、2025年11月27日更新）に従った。

※1：アブラコウモリはバットディテクターで確認した音「48kHz」と周辺環境から同定した。

※2：アカネズミはシャーマントラップで捕獲した。自動撮影で確認したネズミは大きさやシャーマントラップの結果からアカネズミとした。

表 10.7.1-6 (1/2) 哺乳類の確認状況


種名	現地調査における確認状況	対象事業実施区域	
		内	外
 アズマモグラ(死体)	年間を通して畑地を中心に広い範囲で坑道が確認された。坑道のサイズ及び夏季に確認された死体からアズマモグラと同定した。	●	●
アブラコウモリ ※現地では撮影されず	夏季にバットディテクターにより48kHz帯で「ピチュピチュ」という音を確認した。周辺に民家もあることからアブラコウモリとした。	●	●

表 10.7.1-6 (2/2) 哺乳類の確認状況

種名	現地調査における確認状況	対象事業実施区域	
		内	外
 ノウサギ(足跡)	<p>秋季に畑地で足跡のみ確認された。自動撮影カメラにおいても確認されず、生息個体数は少ないと考えられる。</p>		●
 アカネズミ	<p>シャーマントラップを設置したすべての地点で捕獲された。竹林に設置した自動撮影カメラでも確認されており、草地を中心に広い範囲に生息していると思われる。</p>	●	●
 アライグマ	<p>年間を通してフィールドサインで主に確認され、自動撮影カメラでも撮影された。原市沼川でも確認されており、広い範囲に生息していると考えられる。様々な小動物を捕食することが知られており、生態系への影響が懸念される特定外来生物である。</p>	●	●
 タヌキ	<p>冬季、夏季、秋季にフィールドサインが確認され、設置したすべての自動撮影カメラでも多く撮影された。年間を通して広い範囲を利用していると考えられる。</p>	●	●
 キツネ	<p>冬季、春季、夏季にフィールドサインが確認され、自動撮影カメラでも撮影された。行動範囲が広い種であり、年間を通して餌場や移動経路として、広い範囲を利用していると考えられる。</p>	●	●
 アナグマ	<p>夏季に竹林に設置した自動撮影カメラで撮影された。竹林を中心に生息していると考えられるが、撮影日数は少なく、個体数は少ないと考えられる。</p>		●
 ハクビシン	<p>果樹園近くで糞が確認されたほか、自動撮影カメラでも撮影された。年間を通して畑地を中心に広い範囲を利用していると考えられる。</p>	●	●
 ノネコ	<p>自動撮影カメラで複数個体が撮影された。畑地で目視による確認もされており、年間を通して広い範囲を利用していると考えられる。様々な小動物を捕食することが知られており、生態系への影響が懸念される外来生物である。</p>	●	●

・シャーメントラップによる確認状況

調査範囲内の3箇所にシャーメントラップを設置し、小型哺乳類の確認に努めた。

シャーメントラップによる捕獲の結果、アカネズミ1種が確認された。アカネズミの捕獲状況を表10.7.1-7に示す。アカネズミは設置したすべての地点で確認された。特に、対象事業実施区域外のS-2高茎草地での捕獲数が多かった。

表10.7.1-7 シャーメントラップによるアカネズミの捕獲状況

調査地点	対象事業実施区域		確認時期				合計
	内	外	冬季	春季	初夏	秋季	
S-1 高茎草地	●			2	1		3
S-2 高茎草地		●	2		2	4	8
S-3 落葉広葉樹林		●				1	1
合計	-	-	2	2	3	5	12

・自動撮影カメラによる確認状況

調査範囲内の3箇所に自動撮影カメラを設置し、その前を通過する哺乳類の撮影に努めた。

自動撮影カメラによる調査の結果、合計7種の哺乳類が撮影された(表10.7.1-8参照)。100日以上撮影された種はタヌキ及びアライグマ、10日以上撮影された種はハクビシン及びノネコであった。自動撮影カメラを設置した各地点における確認状況を表10.7.1-9に示す。

表10.7.1-8 自動撮影カメラによる哺乳類の撮影日数

No.	種名	対象事業実施区域		対象事業実施区域内				対象事業実施区域外				合計					
		内	外	C-1 低木林				C-2 低茎草地					C-3 竹林				
				冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季		冬季	春季	夏季	秋季	
1	アカネズミ		●											1			1
2	アライグマ	●	●	5	6	34	25	2		9	15	1	3	5			105
3	タヌキ	●	●	20	20	33	21	35	11	6	7	9	14	10			186
4	キツネ	●	●		1			1	1		1		3				7
5	アナグマ		●											1			1
6	ハクビシン	●	●		1	8	11				1	1	4	1			27
7	ノネコ	●	●	5	5	1				1	1		4				17
合計	7種	5種	7種	3種	5種	4種	3種	3種	2種	3種	5種	3種	6種	4種	0種		-

注：1) 表中の数値は撮影された日数を示す。

2) 自動撮影カメラの設置期間は春季：3～5月、夏季：6～8月、秋季：9～10月、冬季1～2月とした。

3) C-3 竹林に設置された自動撮影カメラについて、不具合により8月から11月は記録されなかった。

表 10.7.1-9 自動撮影カメラによる各地点での撮影状況

調査地点	撮影状況
 <p>C-1 低木林 (対象事業実施区域内)</p>	<p>対象事業実施区域内にある低木林内に設置し、合計 5 種が撮影された。年間を通してタヌキの撮影日数が多く、近くにため糞が確認されたことから周辺をよく利用していると考えられる。次いでアライグマの撮影日数が多かった。</p>
 <p>C-2 低茎草地 (対象事業実施区域外)</p>	<p>対象事業実施区域外にある原市沼川沿いの低茎草地に設置し、合計 5 種が撮影された。年間を通してタヌキの撮影日数が多かった。次いでアライグマの撮影日数が多く、原市沼川内を移動している様子も確認され、採餌のために河川を利用していると考えられる。</p>
 <p>C-3 竹林 (対象事業実施区域外)</p>	<p>対象事業実施区域外の竹林内に設置し、合計 7 種が撮影された。自動撮影カメラの不具合により、8 月から 11 月においては記録されなかった。タヌキの撮影日数が多地点と比較し最も多かった。春季にアカネズミ、夏季にアナグマが撮影されており、アナグマは本地点の自動撮影カメラでのみ確認された。多くの種が竹林を利用していると考えられる。</p>

## イ 鳥類相

### ・種構成

現地調査によって確認された鳥類は合計 13 目 32 科 59 種であり、うち対象事業実施区域内で確認された鳥類は 30 種であった（表 10.7.1-10 参照）。

全体を目別にみると、最も多く確認されたグループは、スズメ目の 33 種（56.9%）であった。以下、タカ目の 5 種（8.6%）、ペリカン目の 4 種（6.9%）、チドリ目の 3 種（5.2%）、キジ目、ハト目、ツル目、キツツキ目、ハヤブサ目の 2 種（3.4%）、カモ目、カツオドリ目、カッコウ目、ブッポウソウ目の 1 種（1.7%）と続いた。原市沼川では、カモ目やペリカン目、ツル目、チドリ目等の水辺を主な生息地とする種が多く確認されたが、対象事業実施区域内ではスズメ目の中でも市街地や開けた環境を好む種が多かった。なお、コジュケイ、カワラバト及びガビチョウの 3 種は外来種とされている。

表 10.7.1-10 (1/2) 確認された鳥類

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業実施区域		確認時期					猛禽類調査	季節移動型
					内	外	冬季	春季	初夏	夏季	秋季		
1	キジ	キジ	コジュケイ	<i>Bambusicola thoracicus</i>	●	●	●	●	●	●	●		留
2			キジ	<i>Phasianus colchicus</i>	●	●	●	●	●	●	●		留
3	カモ	カモ	カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i>	●	●		●	●	●	●		留
4	ハト	ハト	カワラバト (ドバト)	<i>Columba livia</i>	●	●	●	●		●	●		留
5			キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	●	●	●	●	●	●	●		留
6	カツオドリ	ウ	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>	●	●	●						留
7	ペリカン	サギ	ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i>		●		●					留
8			アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>	●	●	●	●	●	●	●		留
9			ダイサギ	<i>Ardea alba</i>	●	●	●	●	●				通
10			コサギ	<i>Egretta garzetta</i>	●	●	●						留
11	ツル	クイナ	クイナ	<i>Rallus aquaticus</i>		●	●						冬
12			ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i>		●			●				夏
13	カッコウ	カッコウ	カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>		●						●	夏
14	チドリ	チドリ	コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>	●	●		●	●				夏
15		シギ	ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>	●	●	●						冬
16			タシギ	<i>Gallinago gallinago</i>	●			●					冬
17	タカ	タカ	ツミ	<i>Accipiter gularis</i>		●					●	●	留
18			ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	●	●						●	冬
19			オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	●	●						●	留
20			サシバ	<i>Butastur indicus</i>	●	●						●	通
21			ノスリ	<i>Buteo buteo</i>	●	●	●					●	冬
22	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>		●	●				●		留
23	キツツキ	キツツキ	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	●	●	●	●	●	●	●		留
24			アオゲラ	<i>Picus awokera</i>		●	●				●		留
25	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ	<i>Falco timunculus</i>	●	●	●				●	●	留
26			ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>	●	●						●	冬
27	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>		●		●					通
28		モズ	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	●	●	●	●	●	●	●		留
29		カラス	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>		●	●	●			●		冬
30			オナガ	<i>Cyanopica cyanus</i>		●	●	●	●	●	●		留
31			ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	●	●	●	●	●	●	●		留
32			ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	●	●	●	●	●	●	●		留
33		シジュウカラ	ヤマガラ	<i>Poecile varius</i>		●		●					留
34			シジュウカラ	<i>Parus minor</i>	●	●	●	●	●	●	●		留
35		ヒバリ	ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	●	●		●	●	●	●		留
36		ツバメ	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	●	●		●	●	●			夏
37		ヒヨドリ	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	●	●	●	●	●	●	●		留
38		ウグイス	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	●	●	●	●	●	●	●		留
39		エナガ	エナガ	<i>Aegithalax caudatus</i>	●	●	●	●			●		留
40		チメドリ	ガビチョウ	<i>Garrulax canorus</i>	●	●	●	●	●	●	●		留

注：1) 分類・種名及び配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、2025年11月27日更新）に従った。

2) 季節移動型の区分は「瑞穂の動植物：狭山丘陵産鳥類」（瑞穂町教育委員会、平成18年）を参考とした。

留：留鳥、夏：夏鳥、冬：冬鳥、通：通過鳥

3) 猛禽類調査時に確認された一般鳥類は調査日程等をもとに各季に区分した。

冬季：1～3月、春季：4～5月、初夏：6～7月、夏季：8月

表 10.7.1-10 (2/2) 確認された鳥類リスト

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業 実施区域		確認時期					猛禽類 調査	季節 移動型	
					内	外	冬季	春季	初夏	夏季	秋季			
41	スズメ	メジロ	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>		●	●	●	●	●	●		留	
42		ヨシキリ	オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>		●			●				夏	
43		ミソサザイ	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>		●	●						冬	
44		ムクドリ	ムクドリ	<i>Spodiopsar cineraceus</i>	●	●	●	●	●	●	●		留	
45		ヒタキ	トラツグミ	<i>Zoothera dauma</i>		●	●							留
46			シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>		●	●	●						冬
47			アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	●	●	●	●						冬
48			ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	●	●	●	●					●	冬
49			ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>		●	●							冬
50			ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureoreus</i>		●	●							冬
51		スズメ	スズメ	<i>Passer montanus</i>	●	●	●	●	●	●	●		留	
52		セキレイ	ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	●	●	●	●	●	●	●		留	
53			セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	●	●	●	●	●	●	●		留	
54		アトリ	カラワヒワ	<i>Chloris sinica</i>	●	●	●		●	●	●		留	
55			ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>		●	●							冬
56	シメ		<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	●	●	●	●						冬	
57	ホオジロ	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	●	●	●	●	●	●	●		留		
58		カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	●	●	●						冬		
59		アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	●	●	●						冬		
合計	14目	33科	59種	-	30種	45種	30種	27種	22種	17種	25種	7種	-	

注：1) 分類・種名及び配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、2025年11月27日更新）に従った。

2) 季節移動型の区分は「瑞穂の動植物：狭山丘陵産鳥類」（瑞穂町教育委員会、平成18年）を参考にした。

留：留鳥、夏：夏鳥、冬：冬鳥、通：通過鳥

3) 猛禽類調査時に確認された一般鳥類は調査日程等をもとに各季に区分した。

冬季：1～3月、春季：4～5月、初夏：6～7月、夏季：8月

・季節移動型

現地調査により確認された鳥類種を季節移動型によって区分すると、確認された 59 種のうち、一年中生息する留鳥と考えられる種が 34 種 (57.6%) で最も多かった。次いで秋冬に越冬のために飛来する冬鳥と考えられる種が 17 種 (28.8%)、春夏に繁殖のために飛来する夏鳥と考えられる種が 5 種 (8.5%)、春季または秋季の渡り時などに一時的に飛来する通過鳥と考えられる種が 3 種 (5.1%) となった (表 10.7.1-11 参照)。

表 10.7.1-11 確認された鳥類の季節移動型ごとの種数

季節移動型	種数	割合	主な鳥類種
留鳥	34 種	57.6%	キジ、カルガモ、キジバト、アオサギ、オオタカ、カラセミ、コゲラ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ウグイス、ホオジロ等
夏鳥	5 種	8.5%	ヒクイナ、ホトトギス、コチドリ、ツバメ、オオヨシキリ
冬鳥	17 種	28.8%	タシギ、ノスリ、ハヤブサ、カケス、ミソサザイ、ツグミ、ルリビタキ、ジョウビタキ、ベニマシコ、シメ、アオジ等
通過鳥	3 種	5.1%	ダイサギ、サシバ、サンショウクイ
合計	59 種	100.0%	-

注：季節移動型の区分は「瑞穂の動植物：狭山丘陵産鳥類」（瑞穂町教育委員会、平成 18 年）を参考とした。

留：留鳥、夏：夏鳥、冬：冬鳥、通：通過鳥

・ 定点センサス結果 (P-1、P-2)

P-1 では、対象事業実施区域の南側に広がる畑地や樹林を広く見渡せる農道上を定点として調査を行った。周辺環境には畑や水田等の畑地、高茎草地、河川、県道や建物等の人工地、落葉広葉樹林等が含まれる。

確認された鳥類は、合計 15 種 120 個体であった (表 10.7.1-12 参照)。冬季、春季、初夏季、秋季に確認されたヒヨドリ (合計 50 個体、優占率 41.7%) が最も多く、通年で確認されたキジバト (11 個体、9.2%) 及び冬季、夏季、秋季に確認されたハシブトガラス (11 個体、9.2%)、春季、初夏季、夏季に確認されたツバメ (9 個体、7.5%)、冬季、初夏季、夏季に確認されたシジュウカラ (8 個体、6.7%) 等、樹林環境を好む種や畑地、人工地等の開けた環境を好む種が多く確認された。

表 10.7.1-12 定点センサス P-1 で確認された鳥類個体数と優占率

種名	冬季	春季	初夏季	夏季	秋季	合計	優占率
キジ		1			2	3	2.5%
カルガモ		1	2			3	2.5%
カワラバト (ドバト)				1		1	0.8%
キジバト	5	1	1	2	2	11	9.2%
アオサギ		1			1	2	1.7%
ダイサギ		1				1	0.8%
コチドリ		2				2	1.7%
コゲラ			1	1		2	1.7%
モズ	1	1	1	2	2	7	5.8%
ハシボソガラス	2			2	2	6	5.0%
ハシブトガラス	6			1	4	11	9.2%
シジュウカラ	3		3	2		8	6.7%
ツバメ		3	2	4		9	7.5%
ヒヨドリ	3	1	1		45	50	41.7%
ウグイス		1	2	1		4	3.3%
合計種数	6種	10種	8種	9種	7種	15種	-
合計個体数	20	13	13	16	58	120	-

注：優占率 (%) = 種ごとの合計個体数 / 全種の合計個体数 × 100 として算出した。

P-2 では、対象事業実施区域内を広く見渡せる地点を定点として調査を行った。周辺環境には畑地や草地、原市沼川、果樹園、広葉樹林等が含まれる。

確認された鳥類は、合計 18 種 182 個体であった（表 10.7.1-13 参照）。夏季及び秋季に確認されたカワラバト（合計 70 個体、優占率 38.5%）が最も多く確認され、群れで上空を通過する様子が見られた。その他、冬季、春季、夏季、秋季に確認されたヒヨドリ（22 個体、12.1%）、通年で確認されたキジバト（20 個体、11.0%）、ハシブトガラス（14 個体、7.7%）、初夏、夏季に確認されたツバメ（9 個体、4.9%）が続いた。主に樹林環境を好む種や草地等の開けた環境を好む種が多く確認された。

表 10.7.1-13 定点センサス P-2 で確認された鳥類個体数と優占率

種名	冬季	春季	初夏	夏季	秋季	合計	優占率
コジュケイ		1		1		2	1.1%
キジ		2	3		1	6	3.3%
カルガモ		1	1			2	1.1%
カワラバト（ドバト）				30	40	70	38.5%
キジバト	2	3	3	4	8	20	11.0%
ダイサギ			1			1	0.5%
カッコウ					1	1	0.5%
ノスリ	1					1	0.5%
コゲラ			1			1	0.5%
モズ	2	2		1	3	8	4.4%
カケス	1	1			1	3	1.6%
オナガ	1					1	0.5%
ハシボソガラス		4	2	2	2	10	5.5%
ハシブトガラス	2	3	1	2	6	14	7.7%
シジュウカラ	1	1	3	1	2	8	4.4%
ツバメ			7	2		9	4.9%
ヒヨドリ	7	6		1	8	22	12.1%
ウグイス			1	2		3	1.6%
合計種数	8種	10種	10種	10種	10種	18種	-
合計個体数	17	24	23	46	72	182	-

注：優占率（%）＝種ごとの合計個体数/全種の合計個体数×100 として算出した。

・ルートセンサス結果 (R-1、R-2)

R-1 では、対象事業実施区域の南西側から対象事業実施区域内の農道を歩行して調査を行った。周辺環境には原市沼川、高茎草地、畑や水田等の畑地、建物等の人工地、広葉樹林、針葉樹林等が含まれる。

確認された鳥類は、合計 18 種 267 個体であった (表 10.7.1-14 参照)。通年で確認されたヒヨドリ (合計 51 個体、優占率 19.1%) が最も多かった。次いで夏季に群れで確認されたカワラバト (37 個体、13.9%)、通年で確認されたキジバト (36 個体、13.5%)、冬季、春季、初夏、夏季に確認されたキジ (25 個体、9.4%)、通年で確認されたハシボソガラス及びハシブトガラス (24 個体、9.0%) が続いた。主に樹林環境を好む種や畑地のような開けた環境を好む種が多く確認された。

表 10.7.1-14 ルートセンサス R-1 で確認された鳥類個体数と優占率

種名	冬季	春季	初夏	夏季	秋季	合計	優占率
コジュケイ	1	1	1	2		5	1.9%
キジ	7	4	9	5		25	9.4%
カルガモ		2				2	0.7%
カワラバト (ドバト)				37		37	13.9%
キジバト	5	7	5	3	16	36	13.5%
ダイサギ	1					1	0.4%
コゲラ			5			5	1.9%
チョウゲンボウ					1	1	0.4%
サンショウクイ		1				1	0.4%
モズ	3	3		1	5	12	4.5%
カケス		2			1	3	1.1%
オナガ		1				1	0.4%
ハシボソガラス	4	1	2	11	6	24	9.0%
ハシブトガラス	2	1	3	2	16	24	9.0%
シジュウカラ	6	2	4	5	2	19	7.1%
ツバメ		1	4	1		6	2.2%
ヒヨドリ	20	13	3	3	12	51	19.1%
ウグイス	2	3	4	3	2	14	5.2%
合計種数	10種	14種	10種	11種	9種	18種	-
合計個体数	51	42	40	73	61	267	-

注：優占率 (%) = 種ごとの合計個体数 / 全種の合計個体数 × 100 として算出した。

R-2 では、対象事業実施区域の西側に広がる竹林から北側の畑地や水田付近の舗装路を歩行して調査を行った。周辺環境には竹林、草地、畑や水田等の畑地、家屋等の人工構造物、広葉樹林やスギ・ヒノキ植林等が含まれる。

確認された鳥類は、合計 19 種 154 個体であった（表 10.7.1-15 参照）。通年で確認されたハシブトガラスと、春季、初夏、夏季に確認されたツバメと、冬季、春季、秋季に確認されたヒヨドリ（各 17 個体、11.0%）が最も多く確認された。その他、通年で確認されたハシボソガラス（16 個体、10.4%）、春季、夏季に確認されたカワラバト（15 個体、9.7%）が次いで多く確認された。主に樹林環境を好む種や住宅地等の人工地を利用する種が多く確認された。

表 10.7.1-15 ルートセンサス R-2 で確認された鳥類個体数と優占率

種名	冬季	春季	初夏	夏季	秋季	合計	優占率
コジュケイ		1	1			2	1.3%
キジ		6	4		1	11	7.1%
カルガモ		4		5		9	5.8%
カワラバト（ドバト）		3		12		15	9.7%
キジバト	3	3	5	2	1	14	9.1%
アオサギ	1			1		2	1.3%
ダイサギ	1	2				3	1.9%
コチドリ			2			2	1.3%
カワセミ					1	1	0.6%
コゲラ			1	1	3	5	3.2%
サンショウクイ		1				1	0.6%
モズ	1	2	1	1	1	6	3.9%
ハシボソガラス	2	2	2	3	7	16	10.4%
ハシブトガラス	4	6	3	1	3	17	11.0%
シジュウカラ		2	2		4	8	5.2%
ヒバリ		3	2		1	6	3.9%
ツバメ		4	11	2		17	11.0%
ヒヨドリ	8	1			8	17	11.0%
ウグイス		1		1		2	1.3%
合計種数	7種	15種	11種	10種	10種	19種	-
合計個体数	20	41	34	29	30	154	-

注：優占率（%）＝種ごとの合計個体数/全種の合計個体数×100 として算出した。

・繁殖確認状況

種ごとの繁殖の可能性と確認状況を表 10.7.1-16 に示す。

対象事業実施区域内で繁殖の可能性が高いと判断された種として、キジが挙げられる。繁殖期に区域内の畑地や草地等で複数個体のホロうちやつがい、親と行動する幼鳥が確認された。

対象事業実施区域外では、繁殖を確認した種としてハシボソガラスとハシブトガラスが挙げられる。この2種については、送電線の鉄塔内部に営巣が確認された。巣立ち後、間もない幼鳥の様子や、巣材運び等が確認されたことから繁殖の可能性が高いと考えられた種としてムクドリ、カルガモ、モズ、シジュウカラ、ツバメの5種が挙げられる。

その他、繁殖期にさえずりや移動性の高い幼鳥等の確認により、繁殖の可能性はあるものの、繁殖に関わる具体的な情報が得られなかった種として、コジュケイ、ヒバリ、ウグイス、                    外来種ガビチョウ等 11 種が挙げられる。これらの種については、調査範囲内で繁殖しているかどうかについては不明である。

表 10.7.1-16 種ごとの繁殖の可能性と確認状況

繁殖の可能性	確認状況	種名	対象事業実施区域		
			内	外	
繁殖を確認	営巣及び巣内雛を確認	ハシボソガラス	●	●	
		ハシブトガラス	●	●	
繁殖の可能性が高い	繁殖期に営巣可能な環境で雄のホロうちやつがい、幼鳥等を確認	キジ	●	●	
		ムクドリ	●	●	
	繁殖期に営巣可能な環境で巣材運びを確認 巣立ち間もない幼鳥を確認	カルガモ	●	●	
		モズ	●	●	
		シジュウカラ	●	●	
		ツバメ	●	●	
繁殖の可能性があるが詳細不明	繁殖期に営巣可能な環境でさえずりを確認	コジュケイ	●	●	
		キジバト	●	●	
		<span style="background-color: #cccccc;">                    </span>		●	
		ヒバリ	●	●	
		ウグイス	●	●	
		ガビチョウ	●	●	
		メジロ		●	
		<span style="background-color: #cccccc;">                    </span>		●	
		<span style="background-color: #cccccc;">                    </span>	●	●	
		移動可能と思われる幼鳥や家族群を確認	スズメ	●	●
			ハクセキレイ	●	●

## ウ 爬虫類相

### ・種構成

現地調査によって確認された爬虫類は、早春季1種、春季3種、夏季3種、秋季4種、合計2目4科4種であった(表10.7.1-17参照)。うち対象事業実施区域内で確認された爬虫類はニホンカナヘビ1種のみであった。対象事業実施区域外では4種すべて確認された。水田や草地を主な生息地として利用するシマヘビとニホンカナヘビのほか、原市沼川内でカメ類が確認された。各種の確認状況を表10.7.4-18に示す。

表 10.7.1-17 確認された爬虫類





No.	目	科	種	学名	対象事業実施区域		確認時期			
					内	外	早春季	春季	夏季	秋季
1	カメ	ヌマガメ	ミシシippアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>		●	●	●	●	●
2		スッポン	ニホンスッポン*	<i>Pelodiscus japonicus</i>		●				●
3	有鱗	カナヘビ	ニホンカナヘビ	<i>Takydromus tachydromoides</i>	●	●		●	●	●
4		ナミヘビ	シマヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i>		●		●	●	●
合計	1目	4科	4種	—	1種	4種	1種	3種	3種	4種

注：分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、2025年11月27日更新）に従った。

※スッポンは、ニホンスッポンあるいはチュウゴクスッポンの可能性があるが詳細は不明である。

ここではニホンスッポンとして整理した。

表 10.7.1-18 爬虫類の確認状況

種名	現地調査における確認状況	対象事業実施区域	
		内	外
 ミシシippアカミミガメ	全ての季節において、対象事業区域外の原市沼川内で確認された。春季、夏季、秋季には幼体も確認されており、周辺で繁殖していると考えられる。生態系への影響が懸念されており、条件付特定外来生物に指定されている。		●
 ニホンスッポン	保全すべき種の保護の観点から、一部を非公開とした。		●
 ニホンカナヘビ	保全すべき種の保護の観点から、一部を非公開とした。	●	●
 シマヘビ	保全すべき種の保護の観点から、一部を非公開とした。		●

エ 両生類相

・種構成

現地調査によって確認された爬虫類は、春季3種、夏季4種、秋季2種、合計1目4科4種であった(表10.7.1-19参照)。うち、対象事業実施区域内ではアズマヒキガエルとヌマガエルが確認された。確認された種としては、樹林や湿地を利用するアズマヒキガエル、水田や草地を利用するヒガシニホンアマガエル、ヌマガエルであった。また、対象事業実施区域外の新市沼川で特定外来生物であるウシガエルが確認された。各種の確認状況を表10.7.1-20に示す。

表 10.7.1-19 確認された両生類

No.	目	科	種	学名	対象事業実施区域		確認時期			
					内	外	早春季	春季	夏季	秋季
1	無尾	ヒキガエル	アズマヒキガエル	<i>Bufo formosus</i>	●	●		●	●	
2		アマガエル	ヒガシニホンアマガエル※	<i>Dryophytes leopardus</i>		●		●	●	
3		アカガエル	ウシガエル	<i>Lithobates catesbeianus</i>		●			●	●
4		ヌマガエル	ヌマガエル	<i>Fejervarya kawamurai</i>	●	●		●	●	●
合計	1目	4科	4種	—	2種	4種	0種	3種	4種	2種

注：分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、2025年11月27日更新）に従った。

※2025年に新種記載された。上記リストには反映されていないが、日本爬虫両棲類学会の標準和名リストよりヒガシニホンアマガエルとして整理した。

表 10.7.1-20 両生類の確認状況

種名	現地調査における確認状況	対象事業実施区域	
		内	外
 アズマヒキガエル(幼生)	保全すべき種の保護の観点から、一部を非公開とした。	●	●
 ヒガシニホンアマガエル	春季、夏季に対象事業実施区域外で確認された。原市沼川から水田にかけての水辺周辺で確認された。初夏に水田で幼生が確認されており繁殖地として利用していると考えられる。		●
 ウシガエル	夏季、秋季に対象事業実施区域外の新市沼川で確認された。夏季は鳴き声での確認であった。水生生物調査でも幼生は確認されておらず、事業実施区域周辺での繁殖状況は不明である。様々な小動物を捕食することが知られており、生態系への影響が懸念される特定外来生物である。		●
 ヌマガエル	春季、夏季、秋季に対象事業実施区域外で確認され、夏季には対象事業区域内の草地で幼体が確認された。幼生は主に対象事業実施区域外の水田で確認され、繁殖地として利用していると考えられる。埼玉県では国内外来種として定着している。	●	●

## オ 昆虫類相

### ・種構成

調査によって確認された昆虫類は 12 目 152 科 577 種であった（表 10.7.1-21 参照）。目別では、コウチュウ目が最も多く 196 種が確認された。次いで、ハエ目 118 種、カメムシ目 91 種、ハチ目 70 種、チョウ目 54 種、バッタ目 23 種、トンボ目 16 種の順であり、その他の目については 10 種以下の確認にとどまった。

確認された種の多くは、平野部の草地環境や樹林の林縁部に生息する昆虫類であった。一方で、トンボ目やトビケラ目、並びにコウチュウ目のゲンゴロウ科、ガムシ科など、水域を主な生息環境とする昆虫類も確認されており、調査範囲内には陸域から水域に至る多様な生息環境が存在していることが示唆された。

表 10.7.1-21 (1/8) 確認された昆虫類の目ごとの種数

目と名	対象事業実施区域		確認時期				合計
	内	外	春季	初夏	夏季	秋季	
トンボ目	11	15	2	10	9	2	16
ゴキブリ目	1	1	1	—	1	1	1
カマキリ目	—	1	—	1	—	—	1
ハサミムシ目	1	2	1	1	—	1	2
バッタ目	17	20	3	9	13	6	23
カメムシ目	64	59	24	40	41	27	91
アミメカゲロウ目	2	2	2	1	—	—	3
トビケラ目	1	2	—	—	1	1	2
チョウ目	42	30	11	28	27	11	54
ハエ目	79	82	58	28	39	28	118
コウチュウ目	134	120	63	85	75	41	196
ハチ目	56	39	29	27	26	24	70
合計	408	373	194	230	232	142	577